

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(14) 平成13年1月1日

駿河国地誌シリーズ(その3)

駿国雑志 (S220/1)

『駿国雑志』は阿部正信が天保14(1843)年に著した駿河国の地誌であり、その名は様々な郷土資料に出てきます。駿河の国の雑多なことを記してあるので、『駿国雑志』と名づけたのかもしれませんが。

著者の阿部正信は旗本であり、文化14(1817)年に駿府加番(駿府城の警備役)として駿府に赴任しました。在任期間は1年でしたが、公務の余暇に駿河を調査して資料を集め、『駿国雑志』の編さんを開始しました。江戸に帰ってから編さん活動を続け、完成までには25年もの歳月がかかっています。引用した文献は『日本書紀』から始まって600冊以上と、その数の多さに圧倒されます。

『駿国雑志』の写本は国立公文書館内閣文庫や静嘉堂、当館などにあります。写本とは手書きによって書き写した本のことで、当館では明治8(1875)年の写本である49巻(68冊)を所蔵しています。内閣文庫所蔵の『駿国雑志』は49巻(70冊)ですが、当館の『駿国雑志』は「首巻：惣目録、引書目録」と「巻之21(中)：駿東郡村名」が欠けています。全49巻と他の地誌に比較して分量が多く、当時の地誌としては空前の大作です。

『駿国雑志』の内容は、駿河全郡を網羅した地理、歴史、風俗、人物伝記、動植物等々多岐に渡っています。前号までに紹介した『駿河記』は郡ごとに、『駿河国新風土記』もほとんど郡ごとに記述してありますが、『駿国雑志』は項目ごとに記述されています。巻之1には駿河俚言(方言)の項があり「みるい」、「ずない」、「いかい」などについての意味と使われ方が説明してあります。現在では使われなくなった俚言を探すこともできます。『駿国雑志』には江戸時代以前の駿河の事柄が載っています。「駿河小判は?」、「大井川の蓮台は?」、「当時の駿河の方言は?」などの県内の歴史や民俗を調べるのに活用してみたいかがでしょうか。

また、『駿国雑志』の特色の一つは、彩色をほどこした豊富な挿図があることで、当館所蔵の写本にもそれらがふんだんに盛り込まれています。巻之15は正月用の鏡もちの絵が写実的に描かれていますし、巻之19では城ごとの縄張り(平面図)が描かれています。巻之23は、すべてが絵図で占められており、白糸の滝や浅間神社(現：静岡浅間神社)がページいっぱい描かれています。写本ですから阿部正信の画才の本当のところはわかりませんが、文才とともに、画才にもかなりのものがあつたことが想像されます。

『駿国雑志』は静岡県の郷土史研究によく使われています。当館所蔵の写本をひもとくと『駿国雑志』が著された時代に近づくような感じがします。

【参考資料】

『駿国雑志一～四』
(S220/2/2吉見書店)

『静岡県印刷文化史』
(S740/1 静岡県印刷工業組合)